



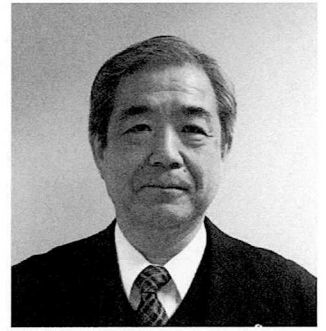
Title	大阪大学看護学雑誌 21巻1号 退職記念特集
Author(s)	永井, 利三郎; 藤原, 千恵子
Citation	大阪大学看護学雑誌. 2015, 21(1), p. 49-52
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56845
rights	©大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

障がい児のもつ課題と支援に取りくんで



この度、平成 27 年 3 月末で定年退職いたします。平成 14 年に保健学科に着任して以後、多くの先生方に大変お世話になってきましたことを、改めて感謝申し上げます。私は昭和 49 年に大阪大学医学部を卒業し、すぐに阪大病院小児科病棟での研修を始めました。1 年後に県立西宮病院に勤務しましたが、縁あって小児神経外来を担当することになり、私の小児神経学とのかかわりが始まることになりました。その後、これまでに多くの神経疾患の子ども達の支援に関わってきました。

最初に取り組みを始めたのはてんかんの子どもたちでした。一時、解剖学講座で中枢神経の組織化学研究に関わり、てんかんモデル動物の研究にも取り組みました。てんかんはご存知のように有病率は 1% 前後とされています。てんかんの治療はこの 30 年間の間に飛躍的な進歩がありました。さらには外科治療の取り組みも進み、完治をめざせる時代になってきました。しかしてんかんに対する社会的な偏見はいまだに大きく、これは世界的に大きな課題とされており、今後取り組まなくてはならない課題と考えています。このような偏見に対する取組は小児期から行う必要があります、諸外国では学校教育の中でてんかんを取り上げているところも出てきています。

二つ目は学校における医療的ケアの課題です。平成 25 年の文部科学省の調査では、全国の特別支援学校で医療的ケアを受けている子どもは 7,842 名であり、その全在籍者に対する割合は 6.1% で、多数の子どもがそのようなケアを必要としています。医療的ケアは平成 23 年度から「特定行為」として一定の法的枠組みが整備されてきましたが、府県によってその扱いは大きな差があります。学校での受け入れ態勢の影響で、学校に行くことができず、在宅で過ごしている子どももまだ多いのも実情です。学校でこのような子どもたちが安全に過ごせる体制の整備は大きな課題です。この体制を充実させていくことの鍵として、医療と教育の連携があります。

三つ目は発達障害の子ども達への取り組みです。なかでも知的障害のない自閉スペクトラム症 (ASD) の子どもたちはその存在もあまり認識されていませんでしたが、2002 年の文部科学省の調査により、診断を受けていない発達障害の子どもが、通常学級に平均で 6.3% いることが明らかになりました。その後、発達障害支援法が制定され、全国的な取り組みが進んできました。ASD の子どもへの支援の原則は、早期発見、早期対応です。私はこれまでに、ペアレントトレーニング (PT) などが我が国でも有用であることを実証してきました。また、大阪府における乳幼児健診での問診項目の見直しに取り組み、来年度から大阪府のほぼ全市町村において、新しい問診項目による健診が行われることとなりました。さらには保健師などの支援職を対象とした PT の研修や医師のための発達障害診療研修も始めています。

これからも様々な障害を持つ子どもたちの支援に継続的に取り組んでいきたいと思っています。

大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
統合保健看護科学分野 生命育成看護科学講座
永井 利三郎

略歴

- 1974 年 3 月 大阪大学医学部卒業
1974 年 5 月 大阪大学医学部小児科研修医
1974 年 7 月 兵庫県立西宮病院小児科医員
1978 年 3 月 滋賀医科大学助手（解剖学）
1980 年 11 月 （カナダ）ブリティッシュコロンビア大学神経科学研究所シニア研究員
1984 年 4 月 兵庫県立西宮病院小児科医長
1989 年 10 月 大阪大学医学部小児科学教室講師
1995 年 6 月 同 助教授
1995 年 8 月 市立豊中病院小児科部長
2002 年 4 月 大阪大学医学部保健学科教授
2004 年 4 月 大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻教授
2006 年 4 月 同 子どものこころの分子統御機構研究センター教授（兼任）
2008 年 4 月 大阪大学・金沢大学・浜松医科大学・千葉大学・福井大学連合小児発達学研究科教授（兼任）

資格・委員等

日本小児科学会専門医、日本小児神経学会専門医 日本てんかん学会認定専門医
厚生労働省疾病障害認定審査部会委員、大阪府発達障害支援体制整備検討委員会委員長
大阪府立箕面養護学校医師講師、豊中市障害児保育担当医、豊中市しいの実学園嘱託医

主な学会活動

日本てんかん学会理事、日本小児神経学会理事・同第 57 回学術集会会長、日本小児科学会代議員、
大阪小児科学会副会長 Member of International Child Neurology Association

専門分野 小児科学 小児神経学 てんかん学 小児保健学

主要著書

1. Nagai T, McGeer PL., ARAKI M and McGeer EG., Chapt. VI. GABA-T-intensive neurons in the rat brain. Vol. 3 Classical transmitters and transmitter receptors in the CNS. Part III, Handbook of Chemical Neuroanatomy. Ed. By A. Bjorklund, T. Hokfelt, M.L. Kuhar, Elsevier p247-272, 1984
2. Nagai T, Yamano T, Fukuyama Y Status epilepticus in infants and young children: basic mechanisms, clinical evaluation, prognosis and treatment. Acta Neurol Scand. 2007 Apr; Volume 115, Issue Supplement s186 Pages 5-86
3. 永井利三郎, 荒木田美香子, 伊藤美樹子, 奥野裕子, 酒井佐枝子, 藤原千恵子, 編 発達障害の子ども
の理解と関わり方入門 広汎性発達障害・ADHD の幼児期から学童期の支援 大阪大学出版会
2010. 9

小児看護の始まりと終わりは、大阪大学



平成 27 年 3 月 31 日に定年退職します。大阪大学では、昭和 46 年 4 月から、福島区の旧病院の小児科病棟（東 4 階病棟）の看護師として 7 年間、医療短大の助手として 7 年間、小児看護の実践と教育のスタートをさせていただきました。就職当時の小児科病棟には、全国から集まった重症度が高く、珍しい疾患の子どもたちと、子どもに付き添って病院で暮らしている親御さんたちがいました。その当時の病棟は亡くなる子どもが多かった印象があります。自分より小さい子が次々と亡くなってしまうのはやりきれない思いで一杯でしたが、それでも看護師を継続できたのは、命の最後の瞬間まで諦めない子どもの姿と、命の瀬戸際になっても親のことを気遣う子どもの優しさに触れたからだと思っています。さらに助手になってからは、同じ子どもを継続して受持つ実習や受け持った子どものその後の経過を学習するプログラムを通じて、病棟にいる時の子どもや親だけでなく、外来通院、復帰した学校生活、施設への通園など、実際に在宅の子どもの生活を知ることができ、受け持ちの子どもや家族と深くかつ視野を広げて接して小児看護を考える貴重な経験をさせていただきました。

その後、他大学や種々の病院での経験を経て、平成 14 年から保健学科に着任し、再度大阪大学で小児看護学を教える機会を得ました。少子化が進み、周囲に小さい子どもがいない環境で育っている学生が、子どもの発達を理解したうえで、個々の子どもに応じた必要なケアを考えるのは難しいと思います。しかし、少子化で、しかも在宅で医療的ケアが必要な状態で生活している子どもが増えている社会であるからこそ、しっかりと子どもを理解した上で、子どもの健康を保持し、ケアを必要とする子どもと家族のニーズに応えることができる人材の育成は重要です。保健学科の学生は、モチベーションを刺激することに成功すれば、最初は興味や関心を示さなかった学生もどんどん変化し、また理解力などの基礎能力が高いので短期間でも目に見えて成長する人がいます。育て甲斐があることは、私には興味深く、やり甲斐を感じて過ごしてきました。この教育の背景には、病棟のセンター化に加えて「2 週間の同じ指導者を担当にして下さい」という私の要望を勤務表のやり繰りをして叶えてくださった看護師長さん、学生の成長をともに喜んでくださった実習指導の看護師の皆さん、さらに私の研究室で研究に励んでくれた多くの院生、修了生の新家講師や高島助教を教員に迎えることができたことも大きく影響していると思っています。また、保健学科の教員や事務職の皆様の暖かな支援も、私の大阪大学の締めくくりを充実した思い出にすることができた大きな一因であると思います。皆様に心より感謝しています。

保健学科を卒業した学生や院生が社会の中でどんどん活躍され、保健学科が今後ますます発展されることを心より願っております。

大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
統合保健看護科学分野 生命育成看護科学講座
藤原 千恵子

ご略歴

1971 年 3 月 大阪大学医療技術短期大学部 看護学科 卒業
1971 年 4 月 大阪大学医学部附属病院（小児科病棟）看護婦（1978 年 3 月まで）
1978 年 4 月 大阪大学医療技術短期大学部 看護学科 助手（1985 年 12 月まで）
1982 年 3 月 佛教大学 社会学部 社会福祉学科 卒業
1986 年 1 月 藍野学院短期大学 看護学科 講師 （1991 年 3 月まで）
1991 年 4 月 同 助教授 （1994 年 3 月まで）
1994 年 4 月 大阪府立看護大学医療技術短期大学部看護学科 助教授（1998 年 3 月まで）
1996 年 3 月 武庫川女子大学大学院 臨床教育学研究科修士課程 修了
1998 年 4 月 滋賀医科大学 医学部 看護学科 助教授 （2000 年 3 月まで）
2000 年 4 月 同 教授 （2002 年 3 月まで）
2002 年 3 月 武庫川女子大学大学院 臨床教育学研究科博士課程 修了
2002 年 4 月 大阪大学大学院 医学系研究科 保健学専攻 教授 （現在に至る）

学 位 臨床教育学博士（武庫川女子大学 2002 年）

受 賞

日本看護研究学会 平成 19 年度 奨励賞
日本外来小児科学会 第 21 回 優秀演題賞
日本家族看護学会 第 19 回 優秀演題賞

学会活動

日本小児看護学会 日本小児がん看護学会 日本小児保健学会 日本看護科学学会
日本家族看護学会 日本発達心理学会 日本健康心理学会

主な著書

「小児看護学」氏家幸子監修 藤原千恵子編著 廣川書店 2002
「小児看護技術」氏家幸子監修 藤原千恵子編著 廣川書店 2002
「小児のメンタルヘルス」及川郁子 草場ヒフミ監編 藤原千恵子著 中山書店 2010
「子どもの PTSD」友田明美 谷池雅子編著 藤原千恵子著 診断と治療社, 2014

主要論文

藤原千恵子, 日隈ふみ子, 石井京子 父親の育児家事行動に関する縦断的研究, 小児保健研究,
56(6),794-800, 1997.11.
藤原千恵子 入院児の家族コーピングに関する研究—家族コーピング尺度の開発—, 家族看護学研究,
9(1), 2-9, 2003.7.
宮野遊子, 藤本美穂, 山田純子, 藤原千恵子 育児関連レジリエンス尺度の開発, 日本小児看護学会
誌, 23(1), 1-7, 2014.3.